

順正学園 ボランティアセンター 通信

VOLUNTEER CENTER OF JUNSEI EDUCATIONAL INSTITUTION

vol. 6
2010.9.30



吉備国際大学ボランティアセンター
吉備国際大学短期大学部ボランティアセンター
順正高等看護専門学校ボランティアセンター
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
TEL/FAX:0866-22-3548 E-mail:E-mail:volcen@office.kiui.ac.jp
ホームページURL:http://kiui.jp/pc/campus/volunteer_c.html
ブログURL:<http://volvolblog.blog114.fc2.com/>

九州保健福祉大学ボランティアセンター
九州保健福祉大学総合医療専門学校ボランティアセンター
〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1
TEL : 0982-23-5576 / FAX : 0982-23-5570
E-mail : volun@phoenix.ac.jp
ホームページURL : <http://www.phoenix.ac.jp/volunteer/>



岡山県が生んだ児童作家・あさのあつこさんに **突撃ボランティアインタビュー!!!!**



小説「バッテリー」や「The MANZAI」、最新刊「火群のごとく」など、時代を超えた「今」を生きる若者的心を描き続ける人気作家・あさのあつこさん。

今回、順正学園ボランティアセンターの学生スタッフは「岡山県出身の著名人にボランティアインタビューを敢行したい!!」と突如、一念発起。執筆活動に加えて、今やテレビやラジオの出演にも大忙しのあさのさんに、ダメ元でインタビューのお願いをするという、超~大胆かつ無謀な行動に走りました。その経緯は…

「どうも最近さあ…学内のボランティア活動に対する熱意が低下してきてない?」「うんうん。それ感じてる」「じゃあさ…有名人にボランティアメッセージを語ってもらうのってどう?影響力もあるし、何より心に届く話が聞けそうじゃない?」「でも、有名人って言ってもさあ…こんな一学生のお願い、誰が聞いてくれるのさ?」「やってみなきゃ分かんないじゃん!よし!思い立ったが吉日、すぐにアポ取る

段取りしよう

…とまあ。いともあつさ実行に。いやはや…若いて行動力がありますよね。そんなこんなで…岡山出身のミュージシャンや俳優など、多くの著名人が候補に上がる中、読書好きな学生がボソリ。「作家のあさのあつこさんはどう?私たち学生の気持ち解ってくれそうじゃない」——おそるおそる、あさのさんの事務所に電話を入れると…マネージャーさんがご丁寧に応答してくださいました。

結果…「はい。スケジュールの関係上、今すぐに…と言う訳には参りませんが、9月であればインタビューをお受けするのは大丈夫ですよ」とのお答えが!!耳を疑いながらも「やった~~~~!!」と大喜びしたのが、今年の4月のお話。約5か月の準備期間を経て、やっと実現した貴重なボランティアインタビューです。

(インタビュー:学生スタッフ4年・若本絹代、同2年・藤本良香、同・水内麻友美)

実録！インタビュー実現までの軌跡！

あさのさんへのインタビュー当日を迎えた9月某日。インタビュアーの学生スタッフは万端の準備と…少々の不安と緊張感を携えて、本番に臨みました。当日、あさのさんにお会いするまでの様子を写真で振り返ってみましょう!



START!



あさのさんへの取材を一週間後、1月未頃、岡山市内のファミレスにて作戦会議。何をどう順番で、どう聞くか…詳細に計画を練りました。そもそも有名人へのインタビューなど初めてだし、緊張するに決まっている！



5



4



3



6



FIN!

とうとう、インタビュー現場に到着！ここは、あさのさんご指定の取材場所、美作市役所の近くにある「ベーカリーいのうえ」さん。併せて、あさのさん行きつけのパン屋さんということで、取材の際には頻繁に使わせていただいているのだとか。笑顔の学生スタッフですが…ここであさのさんにお会いするかと思うと、内心ドキドキです(笑)

「どうも～。初めまして。これにちは～♪…うわっ
うわっうわっつ！！！！どうある？どうあるよ？
ホンモノのあさのあつこさんだ
ああああああ！！！！(笑)緊張のあまり、学生
スタッフの顔は完全に強張ってしまいました
…こんなで取材とか…本当に大丈夫？

あさのあつこさんの
プロフィール

1954年岡山県美作市生まれ。現在も在住。「バッテリー」で野間児童文芸賞、「バッテリーII」で日本児童文学者協会賞、「バッテリーI～VI」で小学館児童出版文化賞を受賞。ほかの作品に「弥勒の月」「No.6」「The MANZAI」など多数。



ボランティア活動の現場から 物を言う人っていうのは、強い

私が大学生の頃?… 実は…怠け者で(笑)

「世界は君たちを必ず必要としている」っていうだけは、 忘れてほしくない

藤 本: それでは、あさのあつこさんのインタビューを決行するにあたって…いくつか…

あさの: 決行って(汗)すごいなあ(笑)

藤 本: いくつか、あさのさんのインタビュー記事を読ませていただいたのですが…非常に多くのインタビューをこなしていらっしゃいます。私たちのような小さな取材まで受けさせていただいて恐縮なんですが、こんなに多くのインタビューを受けるのには、何か理由があるのですか?

あさの: あ、いえ。別に理由があるわけではないんですが…基本的に学生さんとのお話は、なるべく受けるようにしたいなあ、というのがあって。私の本を読んでくださっている層が、学生さんの層と重なる部分もあったりするじゃないですか。そういう意味でやっぱり若い方とお話しする機会は、なるべく持たいんです。インタビュー、そんなにいっぱい受けてるかな? 本が出ると、宣伝も兼ねてというか…大人の下心? みたいなものもあったりするんですけど(笑)でも、こうやって色々おしゃべりさせていただくと、私が教えてもらったり、新しく知ったりっていうこともいっぱいあるので。

水 内: 今回はボランティアインタビューということで…まず、あさのさんのボランティア活動に対するイメージを教えていただきたいのですが?

あさの: ボランティア活動のイメージが大きく変わったのは、やっぱり阪神淡路大震災の時からですね。それまでは正直、ボランティアっていうのは、志のある人、時間的、あるいは経済的にゆとりがある人たちが、善意で関わっていくものだって漠然と考えていたんですね。けれど、大震災以降、例えば派遣村など、いろんなところでボランティアの方たちが関わっているのを見て、ギリギリのところで生きている人たちを支える、ものすごく大きな柱なんだけて考えようになりました。ボランティアの活動がないと、人の生命が成り立たない、っていうようなことはすごくあると思う



藤 本: 少し話は逸れますか…あさのさんが私たちと同じ大学生の時って、どんな学生だったんでしょう?

あさの: 私が大学生の頃ですか? …実は…本当に怠け者で(笑)でも、ずっと物書きになりたいって気持ちはあったんですね。で、若い時って一度思いこんだら、物事を広く捉えることって、なかなか難しいじゃないですか? 今だったら「まあいいか」とか「もう諦めちゃお」とかって、現実からの

ますね。

岡山でも昨年、ここ美作市がものすごい大洪水に見舞われました。私は取材で現地に入させていただいたんですが、被災者の方の話を聞くと、ボランティアの人たちが泥を掻き出してくれたり、荷物を運んでくれたりしてくれたこと以上に、彼らの存在 자체が精神的に大きな励ましになった、と仰っていました。「私はもう独りじゃない」とか「見捨てられたワケじゃない」っていう、助けてくれる人や手を差し伸べてくれる人がちゃんと居ると思ったことが、復旧への第一歩を踏み出せる力になったと聞いて…ボランティアの存在って、私が考えていた以上に大きな意味があるのかな? と思っています。

藤 本: あさのさんご自身が興味のあるボランティア活動とか、今やっているボランティア活動とかは何かありますか?

あさの: 今はやっていませんが、昔、美作市内の子どもたちにプロの劇団の舞台を見せる「子ども劇場」みたいな活動を十何年間、やっていました。災害復旧ボランティアも大切なことなんですが、地域の文化を下支えするようなボランティア活動も、目立たないけれど、すごく必要だと感じています。特にこんな田舎にいると、人が動かなければ文化ってなかなか育たないところがあるので…そういう意味で、自分自身も関わってみたいし、興味はありますね。

藤 本: 少し話は逸れますか…あさのさんが私たちと同じ大学生の時って、どんな学生だったんでしょう?

あさの: 私が大学生の頃ですか? …実は…本当に怠け者で(笑)でも、ずっと物書きになりたいって気持ちはあったんですね。で、若い時って一度思いこんだら、物事を広く捉えることって、なかなか難しいじゃないですか? 今だったら「まあいいか」とか「もう諦めちゃお」とかって、現実からの

逃げ方や適当な誤魔化し方は上手になっていますけど(笑)あの時代、そういうことはすごく下手だったので。ともかく物書きになりたい、でもどうしていいか解かない、つてずいぶんモヤモヤしてましたねえ。だけど、卒業のタイムリミットはどんどん近づいて来るわけじゃないですか? 否応なく社会人にならなきゃいけないし…すごく焦ってた印象が自分の中にはあります。

でも、今思えば、そんなに焦らなくって、よかつたのかなと。例え、大学を卒業するのが22歳だとしたら、それまでに見つけなきゃいけないことって、実はそんなに多くなくて。後で十分取り返しが付いたりとか、もっと後…25歳だったり30歳になってから掴むこともいっぱいあるんですね。ま、この年になったからこそ解るんですけど(笑)だって、あの頃は解らないですモンねえ。なんか、ここまでにしなきゃ、もう私終わっちゃう! とか…変な焦りに囚われてたなって感じは、すごくしますねえ。

藤 本: 確かに卒業とかが近くなると…あれもやっとけばよかった、これもやつとけばよかったってなりますよね。

あさの: そうそう。夢とか、友達とか、想い出とか、恋愛とか…そういうことも含めて、課題をいっぱい残して卒業しちゃう~みたいな気持ちになりますよね。私、なんであの時、こうしなかったんだろうって。でも、実は全然そうではなくて。大学卒業までにできることなんて高が知れerんです。全部できるのは、よっぽどの天才か、ものすごく運の良い人とかに限られて。大多数は、全部引きずったまま卒業して、それを徐々に諦めたり、ちっちゃく叶えたり、別の形に変えて満足したりとかしていくんです。ものすごく大事だと思っていたものが、実は案外つまらなかったってことが分かったりとか(笑)だからそんなに、焦る必要なんて全然ないんですよ。

水 内: あさのさんの代表作「バッテリー」の小説を読んだり、映画を観させていただきました。あさのさんの書く小説って、

中・高校生が主人公のものが多いと思うんですけど、大学生を主人公にしてみようとかは思わないんですか?

あさの: 私ねえ、そうなんです。ストライクゾーンが狭いんです(笑)この前、作家の三浦しをんさんとお話しする機会があって、三浦さんが「あさのさんのストライクゾーンっていつつの?」って聞くから、私「15歳」とか言ったら、「狭ッ!!」ってビックリされて(笑)「あさのさん、ストライクゾーン狭すぎ。それ、将来危ないよ?」って言うから、「じゃあ18歳まで広げる」とかいう話をしてたんですよ。三浦さんは50いくつまでは大丈夫!とか言ってましたんですけど(笑)

そうですねえ…大学生って、私の中のイメージでは、もう大人なんですよ。ちゃんと自分の足で立っていて、親や世間なんかと少しずつ折り合いを付ける方法を覚えていく、みたいな。それをまだ覚えていない、がああああ~~~~~って何かに抗ってる頃っていうのは、私にとってはすごく面白くて。だから、中・高校生を主人公に据えて書くんです。

水 内: 今度、新しい小説を書くとして、ボランティア活動は題材にはなりませんか?

あさの: そうですね。ボランティア活動というものが、社会とどのようにコミットしているのかを考えると…もしかしたら、今の社会を変える力にもなり得るんじゃないかと思うんです。行政や政治とは違ったところから…ボランティア独自の視点から、今の社会を照らし出すことが可能なんじゃないかと。

物語を書くっていうのは、スポットライトを当てるということですから。ボランティアに関わる人たちも十人十色で、いろいろあると思うんですよね? 善意から活動する人もいるでしょうし、別の気持ちから動く人もいるでしょう。あるいは止むに止まれぬ気持ちからっていうのもあるでしょうし…そういう人間模様が、すごく面白いんじゃないかなって思います。ただ、私がボランティアについて書くんだしたら、ただ単に感動的な物語や、泣ける美しい話として書くのではなく…なぜ人はそういう無償の行為に関わっていくのか。その行為によって、人

間や社会がどう変わっていくのかっていう部分を、すごく冷静に書いてみたいなあ…って思うんですよねえ。

それにボランティアって、単に「美しい行動です」とか「褒められる素敵なことです」ってだけではないよう思っています。そんな軽い、浅いものではないような気がして…そこには、もっとドロドロしたものや葛藤だってあるじゃないですか? 自分と相手との思いがかい離すことだってあるでしょうし、自分が泣かなきゃいけないことや、人を泣かすことだってあるでしょう。深く切りこんで行けばいくほど案外、怖かったり辛かったり…そういう世界なのかな? っていう気はしますね。

藤 本: 先ほどお話にも出ましたが、昨年8月、美作市はすさまじい豪雨災害に見舞われました。その時、吉備国際大学の学生も復旧ボランティアに参加したんですが、あさのさんご自身は地元であるような大災害が発生したことについて、どんな印象をお持ちですか?

あさの: 洪水が発生した時、私はちょうどどちらに居なかったんです。こんなことを言うと本当に恥ずかしいんですけど…発生当初は、そんなに酷い状況だとは思っていない。しばらくしてから取材で訪れてみて、「こんなにすごかったんだ」というのを、唖然としながら実感したんです。

アスファルトがはがれて田んぼの中に入っていたり、家一軒が滅茶苦茶になっていたり。兵庫県の佐用町がどんでもないことになっているというのは、ニュースがどんどん流れで来るので、知っていたんですけど。あの時、思ったのは、自分のアンテナをちゃんと外に向けて張り巡らせていないと、重要な情報って引っ掛かって来ないんだなっていうことです。同じ美作市内なのに…って、恥ずかしかりましたね。

藤 本: 今年も全国的に集中豪雨が多いじゃないですか? 雨が降る度に、思い出しますよね。

あさの: そうですよね。ただ、昨年の豪雨災害は、もちろん天災ではあるんですけど、川の造りのあり方とか考えると、やはり人災の面もあると思うんです。天災だから仕

方がないと済ませるのではなくて、なぜこのような災害が起こってしまったのかといふことを、ボランティア活動と並行して考えていかないと、同じことがまた起こるような気がするんです。平凡な言い方でいって、教訓を活かす理性が必要なんだなあ…って。藤 本: ニュースを見ているだけだと、災害の悲惨さって全然伝わってこないんですよね。道路とか割れてるところを見ても「ああ、大変そうだなあ」くらいにしか思わない。

あさの: だから、ある意味、映像って怖いなって思うんです。ボランティア活動って、実際に現地に行ってやってみると、その大変さは解らないでしょう。洪水で水を吸った荷物はとても重いんだとか、夏場のものすごい暑さとか、ひどい臭いとか。やっぱり、自分の感覚で捉えないと解らないんです。そして、そこから物を言う人っていうのは、強い。クーラーの中にいて、あしろこうしろって言っているだけの人は解らない。現場に立った人の強みって言うか…そういうところから、どんどん言葉を発信していないと、いけないなあと思います。

若 本: でも、ボランティア活動に参加する人っていうのは、本当に限られた人になってしまって…学内でも「ボランティアをやりたいです」という学生は、非常に少ないんです。他の学校の学生と話す機会もあるんですけど、ボランティアセンター自体、ちょっとイメージ的に近寄りがたくって…っていう話も聞いたりとかして。

あさの: でも、ボランティアに限らず、若い人ってみんな何かを話したがってるな、って思うんですよ? 今の自分のことを、ちょっと誰かに聞いてもらいたいとか、誰かとおしゃべりしたいとかっていう



気持ちって、すごくあるような気がするんです。だから、最初からボランティア云々じゃなくって、ここにき

ボランティアに対するあさのさんのイメージって…
どんな感じですか?

もし「バッテリー」の巧と豪がボランティアをやったら、何をするかなあ…?

あさのさんが学生の頃って、どんな学生でした?



て気軽にしゃべりましょうよ?みたいな感じで誘ってみたら、一步踏み出すきっかけになるんじゃないかな?

藤本:お菓子パーティーみたいなことを何回かやったんですけど、なかなか集まらなくて。そこには来てくれても、あとのボランティアに繋がらなかつたり。あさの:まあ、そうでしょうね。そう簡単にはボランティアに繋がらないでしょう。私がやつていた「子ども劇場」のボランティアも一番多い時で、500人近い会員が参加していました。地元の文化センターに年6回、プロの劇団を呼んで、生の舞台を観る。子どもたちと一緒に、お母さんたちも楽しみなが。

でも、やっぱりバトンタッチというか、うまく次の若いお母さん方に繋がらなかつた。中心になっていた私たちが年を取って、子どもたちも大きくなっていくと、もうどんどん縮小してしまって…結局、自分たちの中でだけで完結してしまったんですね。でも、若いお母さん方の話を聞いてみると、やっぱり子育ての悩みを話したり、仲間を作る場所が欲しかったって仰るんです。それを上手く取れなかつた。

藤本:でも、それって、子育てとボランティアを同時進行でできる素晴らしい活動ですよね。子育てって、ボランティア活動と自然と結び付いてくるっていうのは、ありませんか?

あさの:もちろん、あります。子育て自体が無償の行為じゃないですか?それに、子育てをしていると、自分の子だけっていうわけにはいかなくなっちゃうんですよね。我が

子が幸せになるためには、やっぱり周りも幸せじゃないとダメだって思ふんです。だから、母親同士、人と人って自然に結び付いていくと思ってたんですけど…

今は意図的に結び付けていかないと、個として孤立していく状況が非常に生まれやすくなっているように思いますね。だから、学生たちがボランティアに参加しない、いろんな場所で人と結び付こうとしているのと、若いお母さんたちが孤立する状況っていうのは、たぶん無縁ではないと思うんです。そうした学生が、人生の延長で若いお母さんになっていくわけですから、通底するところがあるんじゃないでしょうか?現代は本当に、人同士の結び付き方が下手になっていると思う。

私も3人子どもを育ててきたので、正直解るんですよ。子育てって、ものすごい孤独感の中で行われている。今、問題になっている児童虐待にしたって、そこに歯止めが掛からなくなるっていうのは、やっぱり個として普普通々切れていることと、何か関係があるんだろうなあ…って。皆さんはもう、実感として知つらっしゃると思うんですけど、人と人が結び付くと、そこからパワーが生まれて何かを変えていく力になる。例えばさやかなボランティア活動であっても、人と人が結び付いてこそ初めてできる。それを解っているっていうのは、生きていく上でとても大きな財産だと思います。

水内:では、最後に…今までに10代を終えようとしている高校生や大学生に、何かメッセージを送るとなったら?

あさの:若い人たちにメッセージって、そん

な偉そうなものじゃないんですけど…やっぱり今って、若者たちが生きていくのに大変な時代じゃないですか?これから先っていうのは、そんなにすごく素敵な世界が広がってるよって、なかなか言えないし。もちろん厳しいこともあります。ただ「世界は君たちを必ず必要としている」ということだけは、忘れてほしくない。若い時代を過ぎてきた者としては、すごくそれを言いたいんですね。現代の閉塞感を打ち破って、一步前に進むことができるは、政治家のおじさんたちでもないし、偉い学者さんたちでもない。「あなたたち若者なんだよ」とって。若い力が必要とされているっていうことは、絶対に忘れてほしくないなあ…と思ひます。

一 同:今日は本当にいい勉強をさせていただきました。有難うございました。
あさの:こちらこそ、有難うございました。

あさのさん
ありがとうございました!



インタビューを 終えて。。。



吉備国際大学
心理学部
臨床心理学科4年
若本 絹代

今回のインタビューの中で、あさのさんが「人の結びつきがある人は強い」と仰ったのを聞いて、私自身、今までやってきたボランティア活動は間違いじゃなかったんだ、とあらためて思いました。作家さんの言葉というのは本当に力強い。何ごとも真摯に取り組んでいるあさのさんの姿に、大事なことを学ばせていただきました。



吉備国際大学
保健科学部
看護学科2年
水内 麻友美

高校生の頃に「バッテリー」を読んで、あさのさんのファンになりました。大学に入學してから関わってきたボランティアについて、大好きな作家さんにインタビューができたことをとても嬉しく思います。今回のインタビューを通して、これからもボランティア活動を続けていくためのパワーをたくさんいただきました。これからも人と人の結びつきを大切にしながら、ボランティア活動に取り組んでいきたいと思います。

インタビュー
お疲れさま
でしたっ!!



吉備国際大学
保健科学部
看護学科2年
藤本 良香

最初は緊張しましたが、あさのさんはとてもフレンドリーに話してくださいり、気がつけば、あつというまにインタビューが終わっていました。あさのさんのボランティアに対するイメージを聞いて、ボランティアとは何かをあらためて考えさせられました。また、学生の時にやり残したことがあって焦る必要はないという言葉には、心が軽くなったような気がします。



ほっ

特集2

宮崎・口蹄疫被害 救済支援ボランティア

平成22年4月、宮崎県で発生した家畜伝染病・口蹄疫は、国内において過去に例を見ない規模で拡大し、同県内はもとより全国の畜産業に甚大な被害をもたらしました。

こうした状況を受け、順正学園は被害に苦しむ畜産農家を支援するため、九州保健福祉大学をはじめとする各運営校で、義援金の募金活動を展開。加計学園とともに、学生や教職員から集めた約275万円を6月、東国原英夫知事に手渡しました。

本特集では、募金活動などのボランティアに関わった学生や教職員の生の声を交えつつ、口蹄疫被害の様子を振り返ります。



がんばっど宮崎 ~8/27、宮崎県は口蹄疫問題の終息宣言を出した~



九州保健福祉大学 学生担当部長 梅田 靖次郎

宮崎県に大きな被害を与えた口蹄疫とは、牛や豚などの偶蹄目が感染する伝染病で、非常に強力な感染力を持っています。一週間程度の潜伏期間があり、その間にも体内で増殖し、周囲にウイルスを拡散します。人体には無害とされますが、人を媒介して家畜の感染が拡大する可能性もあります。

国の指針で、拡大防止のため疑いのある家畜も殺処分されました。

そのため、集団の中の一頭に症状が見られた時には、既に周囲に多数の感染が起きていると考えられ、一頭でも感染した家畜が見つかると、その農場の家畜は全て殺処分となってしまいます。わずか4か月あまりの間に処分された家畜の数は29万頭にも達しました。

実際に大切な家畜を犠牲にした畜産関係の方々、殺処分や消毒作業に携わられた関係者の方々のやりきれない切なさやご苦労は、想像を絶するものであったことと察せいたします。毎日報道されるニュースで、処分対象の家畜の数が増え続ける日々に、私たちも胸が締め付けられる思いでした。

本学在学中の学生の家族にも、直接被害を受けています。また、最も被害の大きかった県東部の川南町では、「街が消える」という見出しで新聞記事でも取り上げられました。こうした状況下において、少しでもお役に立ちたいという気持ちで、ボランティアセンターの学生とともに義援金を募りました。学内でも、学生や教職員が多く通る場所の10か所以上に消毒マットを設置し、消毒を徹底しました。また、不要不急の外出やイベント等を控えることを促しました。

吉備国際大学、関連校の加計学園からも、街頭や学内で集めた多額の善意の義援金をいただきました。あらためて関係の皆様に心より感謝申し上げます。6月30日、本学のボランティアの細井真理さん、千葉科学大学の渡辺雄大君の学生2名、片寄大学事務局長、太田入試広報室次長と共に宮崎県庁を訪問しました。知事にはお忙しい公務の合間にもかかわらず、直接お会いして義援金と目録をお渡しすることができました。今、宮崎県民はそれぞれの立場で、一日も早い再生・復興を目指して、元気に一歩を踏み出しています。

口蹄疫被害ドキュメント～発生から終息まで

発生

4月20日、宮崎県東部で1例目の口蹄疫発生を確認。すぐさま県対策本部が設置され、移動制限区域の設定や消毒ポイント設置などの処置がなされました。感染が猛威をふるい始めた5月には、県が自衛隊に対して災害派遣を要請。しかし、大規模農場に伝染したことなどもあって、処分対象となる家畜が数万頭を超え、被害は拡大の一途をたどり始めます。



拡大

感染の拡大を受け、政府は5月中旬に対策本部を設置。宮崎県内の各地では移動や搬出に制限がかかり、消毒されるトラックや乗用車が日常的に見受けられるようになります。東国原知事はついに「口蹄疫非常事態宣言」を発表。種牛の緊急避難措置やワクチン接種後の全頭殺処分など、同県の畜産業にとって重大な決定が次々と下される中、6月には処分対象が20万頭を超ました。

募金活動

こうした状況を受け、九州保健福祉大学では5月中旬から、口蹄疫で被害を受けた畜産農家を支援しようと、義援金の募金活動を開始しました。学内外の各所で、学生たちが募金箱を持って立ち「口蹄疫被害に苦しむ農家の救済支援にご協力下さい」と呼びかけると、通行人ら多くの人々が呼びかけに応じてくれました。岡山県高梁市でも、吉備国際大学の学生らが同様の募金活動を行い、集まった净財は九州保健福祉大学に送られました。



義援金贈呈

順正学園と加計学園の学生や教職員らの協力の甲斐あって、約1ヵ月半で275万2千円もの募金が集まりました。6月30日には、九州保健福祉大学の細井真理さん、梅田靖次郎教授らが代表して宮崎県庁を訪れ、東国原知事と直接面会し、義援金を贈呈。細井さんが「多くの善意によって集まつたお金です。口蹄疫被害に苦しむ方々の支援に役立ててください」と募金の一部や目録を手渡すと、東国原知事は「畜産農家や地域の支援復興に使いたい」と笑顔で応じてくださいました。



終息

ワクチン接種を終えた家畜が大量に殺処分される中、被害は次第に収まり始め、7月には非常事態宣言も一部解除。こうした動きを皮切りに、宮崎県内では移動・搬出の制限区域も次々に解除され、8月27日には、ようやく終息宣言が出されました。しかし、殺処分された家畜は全体で約29万頭に及び、同県内の経済的損失は約2350億円にも上るとする試算が発表されるなど、口蹄疫が残した被害の爪跡は、非常に深刻なものとなってしまいました。

「口蹄疫義援金の呼びかけを通して」

九州保健福祉大学 社会福祉学部 臨床福祉学科3年 細井 真理



口蹄疫が発生した当初、私たちボランティアセンターの取り組みは、まだ完全ではありませんでした。そんな中、被害は更に拡大を続け、また身近に被害に遭われた方がいることを知り、私は学生スタッフとしてやるべきことによく気付きました。まず、学生スタッフに協力してもらい、消毒を呼びかけるチラシを校内に掲示・配布するなど、学生に口蹄疫についての理解と意識を高めてもらえるよう取り組みました。また、校内の数か所に義援金の募金箱を設置し、休み時間を利用して募金の呼びかけを行いました。

活動を通じて気付いたのは、人々に伝えたいことをいかに投げ掛けられるか。また、その気持ちと力の入れ具合で、人々の理解と協力を得ることができるということです。私は正直、こんなに多くの義援金が集まるとは思いませんでした。なぜなら私自身、口蹄疫という言葉を今回初めて耳にしたし、活動として取り組むにしても前例がなかったため、暗中模索の状態だったからです。しかし、身近にいる学生スタッフの協力や教職員からのアドバイス、そして何より、義援金に協力してくださった方々のお陰で、今回このような形で宮崎県への貢献ができたのだと思います。

どんな形であっても人々の温かい想いは、この上ないプレゼントだと思います。この義援金が、少しでも畜産農家の方々の生活に役立てば幸いです。私は今回の取り組みを通して、人と人との繋がりの大切さや、そのありがたみをあらためて知ることができました。今後もボランティアに携わる者として、もっと周りに目を向け、自分が成すべきことを果たしていこうと思います。

ニュース&トピックス

災害復興、地域及び国際貢献、障がい学生への支援等…多方面の分野において、活動の幅を広げている順正学園ボランティアセンター。平成22年度に実施した最新のセンター情報をお届けします。

吉備国際大学サッカーボランティア奮闘記

ボランティアで高梁を元気に——先ごろ、千葉国体で準優勝に輝いた吉備国際大学のサッカーボランティアセンターが今年に入って、地域のボランティア活動に熱心に取り組んでいます。清掃活動や盆踊りへの参加、高齢者施設への訪問など…数々の全国大会にとどまらず、世界大会にも選手を送り出す強豪チームでありながら、大学と地域への愛着を忘れずにボランティアに励む彼女たち。「自分たちが頑張れば高梁がもっと活性化するはず」。そんな思いを胸に、地域貢献に汗を流すメンバーの姿を追いました。

「あーりやーさー、よーいやさー」。真っ黒に日焼けした顔に黄色いユニフォーム姿。8月14日、岡山県高梁市の駅前大通りで開かれた備中たかはし松山踊りの輪の中に、はにかみながら身振り手振りで踊る同部の面々がありました。1時間ほど踊った後は、手にしたうちわをゴミ袋に持ち変えて踊り会場の清掃にも参加。「地域住民の方々とふれ合えるのが何より楽しい。ボランティアは大変だけど、そこに達成感や団結力が生まれるので苦にならない」と部員のスポーツ社会学科3年、大田真由香さん。

太田真司監督指導の下、部員約50人を抱える同部は、全国から有名選手が集まる大学女子サッカーチームでもあります。近年では第17回全日本大学女子サッカー選手権大会(20年)でベスト4、第25回ユニバーシアード競技大会(21年・セルビア共和国。女子部の選手4人が出場)において準優勝するなど、輝かしい成績を収めています。また、日



真夏の炎天下、国道沿いの雑草を抜いています。
足腰がしんどいけど、これも練習!

本女子サッカーなでしこリーグ(1部リーグ)にも多くの選手を輩出し、岡山湯郷Belleや浦和レッズ・レディースなどで活躍しています。

そんな彼女たちがボランティア活動に精を出し始めたのは今年、日本女子サッカーチャレンジリーグ(2部リーグ)参入を目指したのがきっかけ。リーグ参入で注目を集めれば、高梁市全体の活性化にも繋がり、多くの市民に女子サッカーの魅力を知ってもらえます。そのためにはサッカー以外でも、何か自分たちに出来る地域貢献はないだろうかと考え、多種多様なボランティア活動に参加するようになりました。

7月には真夏



備中たかはし松山踊りに初参加。
彈む太鼓に踏む足取りも…軽く踊れたかな?

テレビドラマのエキストラボランティア



伝統的な建物が並ぶ吹屋地区を、戦時の京都の町並みに見立てて撮影が行われました

吉備国際大学の学生たちは6月13、20の両日、岡山県高梁市成羽町の吹屋地区で行われたテレビドラマの撮影に、エキストラボランティアとして参加してきました。

ボランティアは、映画などのロケを活かしたまちづくりに取り組んでいる市民団体「たかはしフィルム・コミッション」からの要請。日本を代表する脚本家・橋田壽賀子さん脚本による「戦争と平和」をテーマにしたドラマ「99年の愛～JAPANESE AMERICANS～」の撮影が行われ、一般市民ら約200人がボランティアでエキストラに扮しました。



ドラマ撮影用の衣装に身を包んだ学生たち。
負傷したメイクが痛々しい…



スタッフの指示でドラマ撮影は進行します。
待ち時間が長かったり何度も撮り直したり…大変な作業です

学生は約20人が参加。撮影現場に到着すると早速、スタッフから指示を受け、撮影用の衣装に着替えました。ドラマの時代設定が主に戦前から戦後ということもあり、学生たちは国民服やもんぺに身を包み、汚れや傷跡をメイクで施すなど徹底した変身っぷり。国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている吹屋地区を京都の町並みに、国内最古の現役木造校舎を有する吹屋小学校を戦時の病院に見立てて、撮影は順調に行われました。

現場では、負傷して手当を受けたり、担架で運ばれたりするシーンの撮影に参加した学生も。エキストラとはいって、スタッフから細かい指導を受けながら、熱のこもった演技を見せていました。復員兵に扮した吉備国際大学社会福祉学科3年の峰雄大君は「同じシーンを何回も繰り返し撮るなど、ドラマ撮影の大変さを知ることができた。疲れたけれど、貴重な体験が出来ました」と話していました。

ドラマ「99年の愛～JAPANESE AMERICANS～」は11月3～7日の5日間、毎日午後9時から、TBS系列局で放送予定です。



ボランティアを終えた後の達成感は、何物にも代えがたいです

薬物乱用防止ヤング街頭キャンペーン&食品衛生セルフクリーン作戦

吉備国際大学の学生と岡山県備北保健所は合同で「薬物乱用防止ヤング街頭キャンペーン」(6月29日)と「食品衛生セルフクリーン作戦」(8月3日)を実施しました。学生たちは駅前など街頭で、高校生らに覚せい剤など違法薬物の恐ろしさを訴えたり、一日保健所長として食中毒予防を呼びかけたりするなど、熱心に活動しました。

ヤング街頭キャンペーンには約10人の学生ボランティアが参加。岡山県高梁市のJR備中高梁駅周辺で帰宅途中の高校



JR備中高梁駅周辺で高校生に薬物乱用防止を訴える吉備国際大学の学生ら

生や会社員を呼び止め、薬物乱用防止を訴えかけるちらしやティッシュなどの啓発グッズ約1000セットを配布しました。



一日保健所長として主婦らに食中毒予防を呼びかける平井さん

セルフクリーン作戦には、順正学園ボランティアセンターの学生リーダー・藤本良香さんと同センタースタッフ・平井利枝さんが、一日保健所長として参加。同保健所で委嘱式を行った後、同市内2か所のスーパーで「食中毒が増える季節です。まな板や包丁の洗浄、手洗いをこまめに行ってください」と呼びかけながら、買い物中の主婦らに啓発ちらしやうちわを配りました。

看護学科の学生である平井さんは「一日保健所長として、いろんな人に呼びかけることの大変さを知りました。皆さんも食中毒には気をつけてほしいです」と話していました。

わくわく子どもフェスタ21

地域で親子がふれ合う機会をつくろうと「わくわく子どもフェスタ21」が6月19日、岡山県高梁市の栄町商店街で開かれ、吉備国際大学の学生がボランティアとして参加しました。

約300軒のアーケード商店街を歩行者天国にして、市内のスポーツ少年団や子ども会などがフリーマーケットや屋台を出店。吉備国際大学の学生は、同商店街の空き店舗を利用して長年取り組んでいる「手作り遊び教室」から、木工やビーズ細工、手作りうちわやスーパーボールすくいなどの材料を持ち出し、子どもたちと一緒に工作を楽しみました。

木工コーナーでは、一生懸命に金づちをたく子どもたちが横からサポート。子どもたちは好きな形の木片を選んで、人形や車など思い思いの作品を作っていました。ビーズ細工では、お母さんたちも一緒にネックレスやブローチ作りに夢中になっていました。

学生ボランティアの吉備国際大学スポーツ社会学科1年、井上幸紀君は「子どもたちは無邪気に木工の作り方を聞いてきたりして頼ってくれるので、やりがいがある。これからも機会があれば参加したい」と話していました。



木工コーナーなど多くの親子連れでぎわった「わくわく子どもフェスタ21」

吉備国際大学留学生によるボランティア

吉備国際大学では平成22年9月現在、中国や韓国をはじめとする5か国、約530人の留学生が学んでいます。中には、少しでも誰かの役に立ちながら交流を深めたいと考え、ボランティアに取り組む留学生も少なくありません。ここでは、学内外で熱心に活動する留学生2人を紹介します。



要約筆記ボランティア

吉備国際大学 社会学部
ビジネスコミュニケーション学科4年 王 翔

入学して半年たった頃、ゼミを選ぶことになりました。プログラミングを学びたかった私はコンピューターが専門の佐藤匡先生のゼミを選びましたが、佐藤先生から「プログラミングは教えます。ただし、要約筆記をするのが条件です」と言われました。留学生には無理でしょう…と思っていたが、乗りかかった船だと思って条件を受け入れました。これがきっかけで、留学生でありながら日本語の要約筆記を始めるようになったのです。

要約筆記とは、聴覚に障がいを持つ人のために、人の話している内容を要約し、文字にして伝えることです。私の場合は、手書きではなくパソコンでタイピングして文字にします。そして、たとえ留学生であっても、現場では日本人学生と同じ日本語能力が求められます。最初は、相手の日本語を聞き取って、さらに要約して、遅れないようにタイピングするのはとても難しかったです。何をしゃべっているのか分からなくて、その人の顔をじっと見ながら、ほっとすることも何度もありました。

要約筆記はとても難しいですが、今振り返ると本当にいい体験だと思います。要約筆記サークルの一員として、入学式や卒業式、ボランティアシンポジウムにも参加しました。そして今は障がいを持つ高校生に要約筆記をするため、毎週、総社市の高校に通っています。

要約筆記をすることは、誰かの助けになれるし、自分の日本語の勉強にもなります。でも代わりに、要約している時の緊張感は言い表せないほど強いものです。これは、いい体験をさせてもらった代価だと思います。私は神様によく「どうかこの人にゆっくり話をさせてください」と祈ります。これからも、この緊張感を楽しみながら、頑張りたいと思います。



絵本を日本語から中国語へ

吉備国際大学 社会学部
ビジネスコミュニケーション学科3年 張 艷

皆さんは2008年の四川省大震災を記憶していますか?この時、私は中国の被害を受けた子供たちに絵本を寄贈する相談を、順正学園ボランティアセンターから受けました。日本語の絵本を中国語に翻訳する仕事です。最初は「何だ、子供の絵本か。簡単じゃない!」と、その仕事を軽く考えていました。

ところが、日本語には擬音詞や擬態詞が多く、それらをどう中国語に翻訳すればよいのか、私には分かりませんでした。中国と日本では楽しさや面白さの表現が違うのです。初めての翻訳で「上手くできるかな?」と少々不安になりました。

その時、担当ゼミの佐藤匡先生の「日本語で困ったなら高橋正巳先生に相談すれば」という言葉を思い出し、さっそく相談へ。中国の子供たちのあどけない顔を思い浮かべると、できる限りのことをしてやりたかったです。そのことを高橋先生に話していたら、私の心を込めた言葉遣いで、絵本の面白さや楽しさを伝えれば良いのだということに気付きました。しかも子供たちに理解できる言葉を探せばいいのです。

私の翻訳した絵本が、四川省のどこかで子供たちに読まれているかと思うと、すごく嬉しい思います。このワクワクした思いに味を出して、もっと多くの中国の子供たちに、日本の絵本を読ませてあげたいと考えました。だから今、もっと難しい絵本の翻訳にチャレンジしています。今度は翻訳した絵本を、すべてパソコンで処理する方法も教えてもらいました。パソコンの苦手な私は、おかげでデジタル処理まで上手になりました。

ボランティア活動って大切ですごいことです。他の人に自分の元気を送るだけでなく、それ以上の元気や前向きなパワーを自分自身がもらうのですから。「愛の手を差し伸べたら世界はもっと美しくなる」という言葉は本当ですね。

ボランティア登録システム「VISKET」ご利用のお知らせ

順正学園ボランティアセンター(高梁キャンパス)では、年々増大しているボランティアの派遣・要請件数に迅速に対応するため、登録作業やボランティア情報配信を携帯電話やパソコンで行うシステム【通称:VISKET(ビスケット)】を運用しています。

登録方法

1 携帯電話またはパソコンから
[<https://www.nico2.co.jp/ssl/tei/>]にアクセス。

携帯電話の方は、右記の
バーコードからもアクセス
できます。



2 新規登録の場合は、表示アドレスより空メールを送信。
登録済みの場合は、メールアドレスとパスワードを入力。

3 登録一覧の【1.ボランティア】をクリックし、【学校法人順正学園ボランティア参加システム】の必要事項をチェック・記入して配信すれば、登録完了となります。

センター報告



センター長あいさつ

学校法人 順正学園 ボランティアセンター センター長 加計 美也子

本年度より、当法人の名称が変更されたことに伴い、開設9年目を迎えた当センターも「順正学園ボランティアセンター」と名称変更いたしました。

また、吉備国際大学が開校20周年を迎える年でもあり、当センターも学園共々、大きく飛躍する一年にしていく所存でございます。

さて、平成22年4月、九州保健福祉大学がある宮崎県では、家畜の牛や豚に感染する伝染病・口蹄疫が発生し、県内全域で猛威を振るいました。本通信でも詳細について触れておりますが、最終的に家畜の殺処分数は約29万頭、県全体での経済的損失は約2350億円に上るなど、8月に終息宣言が出されて解決するまでに、県内の畜産業に甚大な被害をもたらす残念な結果となってしまいました。

こうした被害を受け、順正学園では加計学園と合同で学生や教職員、地域市民の方々から口蹄疫被害救済支援のための義援金を募ったところ、約275万円にも上る淨財が集まりました。これは金額の多寡にかかわらず、多くの人々が、この未曾有の“災害”ともいるべき口蹄疫被害に関心を持ち、善意の心

を寄せてくださったお陰と考えております。「少しでも被害に遭われた方々の役に立てれば」——その純粋な気持ちこそが、ボランティアとして形ある結果を残すことに繋がったのではないかでしょうか。

近年は、被災地だけではなく、対処できない大規模かつ深刻な災害が頻発しております。それは地震や台風といった自然災害だけにとどまらず、先述しました口蹄疫のような伝染病による被害や、人為的な原因による大きな事故などの人災も含まれています。当センターとしては常日ごろ、こうした災害に対する準備を怠ることはありませんが、その動きに先駆けて、いつも学生たちから「何か自分たちにできることはないだろうか」という声が真っ先に上がるのも事実です。

先日、千葉国体で準優勝という成績を収めた吉備国際大学サッカー部・女子部の面々も「大学がある高梁市を元気づけたい。そのためには何ができるだろう?」と考え、熱心なボランティア活動に取り組み始めました。おのずからできることを考え、それを実際の行動に移す。こうした奉仕の精神の根源を忘ることなく、今後もますます充実したボランティア活動に励んでいく所存でございます。

平成21年度順正学園ボランティアセンター活動報告

高梁キャンパス

1. 災害復興支援セクション

- 山口県防府市の豪雨災害に伴う募金活動 ●岡山県美作市・兵庫県作用町の豪雨災害に伴う被災地復旧ボランティア活動及び募金活動 ●高梁市災害ボランティアセンター研究会「災害ボランティアセンターワークショップ」 ●中南米・ハイチ大地震に伴う募金活動

2. 地域貢献セクション

- 高梁市・地域住民等との合同ボランティア活動(本町地区「町通りのひな祭り」、栄町商店街「手作り遊び教室」、わくわく子どもフェスタ21など) ●新入生歓迎クリーン作戦 ●要請組織へのボランティア派遣 ●高梁市内の中高校生に対するボランティア講演 ●小学生等登下校時の声かけ運動 ●第100回記念・手作り遊び教室 ●ボランティア実践発表シンポジウム第10回記念大会 ●学生×ボランティア向上プロジェクト「サンタ大作戦!!!」

3. 国際貢献セクション

- 地球市民フェスタinおかやまⅡ2009への参加 ●国際協力実習事前研修会(講師~公設国際貢献大学校運営機構理事長・的野秀利氏) ●国際協力実習(インドにおけるボランティア活動) ●インド・プネ市のストリートチルドレン支援(エコバッグ、Tシャツ販売等)

4. 障がい学生支援セクション

- ノートテイク支援に関する業務(式典、講義中のノートテイク等) ●ノートテイカー養成講座 ●ICTを活用した情報保障の高度化についての研究

5. その他・活動支援

- 吉備国際大学ボランティアプレート(KVP)の結成 ●岡山県学生ボランティアセンター学生スタッフ連絡会の新人スタッフ研修会(岡山県ボランティア・NPO活動支援センター主催)への参加 ●大学ボランティアセンター全国フォーラム・学生スタッフセミナー2009への参加 ●学園キャンパスあいさつ運動 ●アルミ缶回収事業 ●ボランティア情報システム「VISKET」によるボランティア登録及び、活動情報の管理 ●順正学園・高梁キャンパスボランティアセンター通信の作成・配布

宮崎キャンパス

1. ボランティア研修・講習会

- ボランティア活動オリエンテーション(初めてのボランティア) ●介助法講習会

2. 地域貢献・ボランティア参加

- 環境保全に伴う学園祭でのチェーンソーアート実演 ●延岡アースデイへの参加

3. 災害時対応

- 山口県防府市の豪雨災害に伴う募金活動 ●中南米・ハイチ大地震に伴う募金活動

4. その他・情報発信

- 携帯電話によるボランティア参加システムの構築・案内 ●宮崎キャンパスボランティアセンター通信の作成・配布 ●大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2009への参加

順正学園ボランティアセンター賛助会

～ご支援、ご協力感謝申し上げます～

順正学園ボランティアセンターでは平成17年11月より、実際に身体を動かして社会貢献を実践する時間的余裕がない企業や個人にお願いして、賛助・寄付会員になっていただいているいます。

平成21年度の会員数は法人会員72社・団体・個人会員119人(平成22年3月末現在)。また、3団体より助成金を頂戴し、納入いたしました合計金額は314万6100円となりました。

これらの費用は、同センターが実施する災害復旧支援活動、地域貢献活動、国際貢献活動や障がい学生支援活動など、さまざまなプロジェクトに有効活用されます。

平成21年度賛助・寄付会員・助成団体ご芳名(順不同・敬称略)

●法人会員

松栄	(岡山県高梁市)	(株)イマイ	(岡山県高梁市)
(有)旭空調設備メンテナンス	(宮崎県宮崎市)	(株)南九州医理化	(宮崎県宮崎市)
社会福祉法人潤真会(特別養護老人ホーム白和荘)	(岡山県高梁市)	(株)トータルデザインセンター	(岡山県岡山市)
社会福祉法人順正福祉会(順正保育園)	(岡山県岡山市)	(株)神陵文庫岡山営業所	(岡山県岡山市)
(有)亀屋防災	(岡山県倉敷市)	(株)黒崎塗装店	(岡山県岡山市)
(株)SBC	(東京都品川区)	宮崎綜合警備(株)	(宮崎県宮崎市)
(株)中電工高梁営業所	(岡山県高梁市)	医療法人池田医院	(岡山県高梁市)
(株)丸川建築設計事務所	(岡山県岡山市)	(株)宮崎科学	(宮崎県日向市)
医療法人高梁整形外科医院	(岡山県高梁市)	中村建設(株)協力会(宏栄会)	(岡山県高梁市)
(株)南日本環境センター	(宮崎県延岡市)	曙警備保障(株)	(岡山県岡山市)
(株)矢野デザイン事務所	(岡山県岡山市)	(株)装巧社	(岡山県岡山市)
(株)日立ビルシステム岡山営業所	(岡山県岡山市)	(株)共栄商事	(岡山県高梁市)
(株)マルミ歯科商店岡山支店	(岡山県岡山市)	第一相互警備保障(株)	(岡山県岡山市)
(株)トーアサイエンス	(宮崎県宮崎市)	新田写真館	(岡山県真庭市)
友野印刷(株)	(岡山県岡山市)	(株)ツキモト	(岡山県高梁市)
(株)三光設備工業	(宮崎県延岡市)	(有)クリップ	(宮崎県延岡市)
(株)山下体育社	(岡山県岡山市)	(株)朝霧	(岡山県高梁市)
(株)協同防災	(宮崎県宮崎市)	弁護士法人関西法律特許事務所	(大阪府大阪市)
京セラ丸善システムインテグレーション	(岡山県岡山市)	蜂谷工業(株)	(岡山県岡山市)
(株)TEI	(岡山県高梁市)	旭設備商事(株)	(岡山県総社市)
(有)アキバ電器	(岡山県高梁市)	備中開発(株)	(岡山県高梁市)
(有)大学製本所	(岡山県岡山市)	(有)坂市	(岡山県高梁市)
協同精版印刷(株)	(岡山県岡山市)	高梁ロータリークラブ	(岡山県高梁市)
(有)内倉写真館	(宮崎県延岡市)	明巧堂印刷(株)	(宮崎県延岡市)
(株)英陽産業	(兵庫県神戸市)	(株)大本組	(岡山県岡山市)
(有)インターテクノ	(宮崎県宮崎市)	白馬看板店	(岡山県総社市)
(合)樋口商店	(岡山県高梁市)	新見ロータリークラブ	(岡山県新見市)
清本鐵工(株)	(宮崎県延岡市)	(有)森自動車工場	(岡山県高梁市)
(株)能登原商店	(岡山県高梁市)	アイサワ工業(株)	(岡山県岡山市)
(株)岸田電業	(宮崎県延岡市)	(株)ミツボシ	(岡山県岡山市)

木口建設(株)	(岡山県高梁市)
種田和英法律事務所	(岡山県岡山市)
(株)テレビせとうちクリエイツ	(岡山県岡山市)
(株)JK	(岡山県岡山市)
丸善(株)岡山支店	(岡山県岡山市)
(株)九電工延岡営業所	(宮崎県延岡市)

(株)ながと	(宮崎県延岡市)
セコム(株)高梁営業所	(岡山県高梁市)
旭マルキガス(株)	(宮崎県東臼杵郡)
(株)田中紙店	(岡山県高梁市)
旭有機材工業(株)	(宮崎県延岡市)

●個人会員

法人本部	加計 美也子、加計 勇樹、山崎 貴夫、片岡 裕文、讃岐 洋子、大月 唯嗣、加藤 貴士、溝井 智子、岡本 直也、中根 公郎、黒田 昌樹、三村 光弘、後藤 悟、大西 基広、長櫛 雅章、高田 宏美、西 正樹、小河内 大輔、今川 竜治、西 辰弥、山下 美江子、太田 善久、松永 薫士、森脇 久嘉	24名
吉備国際大学	藤田 和弘、古田 知久、村本 茂樹、米良 重徳、塚田 健二、橋本 由紀子、高橋 正巳、佐藤 匠、芝 明義、中山 哲哉、河村 顯治、仁宮 章夫、三宅 俊治、雲津 英子、井勝 久善、栗田 喜勝、平上 二九三、秋山 純一、佐田久 真貴、谷田 恵美子、池永 理恵子、岩田 美幸、横山 奈緒枝、加藤 好信、高木 秀明、川浦 昭彦、末吉 秀二、松永 積惠、甲斐 芳明、下崎 ひとみ、平松 美江、守屋 明子、木村 清則、河合 充恵、猪木原 恵、野上 泰治、山河 武二、吉備国際大学同窓会	38名
順正短期大学	山部 正、太田 克子、上田 豊、内田 節子、高見 スマ子、延原 靖子、吉井 敦子、齋藤 美智子、藤井 伊津子、堀 けい子、田坪 由香里、太田 正美、畠 哲男、高杉 直美	14名
順正高等看護専門学校	松本 皓、藤澤 芳美、土肥 瑞恵、森原 百合子、三村 礼子、柳井 好美、根本 浩江、岡本 富恵、林 操、重黒木 直子	10名
九州保健福祉大学	南嶋 洋一、内田 淳子、吉武 重徳、紺野 克彦、倉内 紀子、川野 純一、平井 正巳、富森 美絵子、梅田 靖次郎、栗栖 照雄、秋葉 敏夫、岩城 哲、安原 青兒、徳永 仁、田中 陽子、山崎 きよ子、程炳鈞、加藤 雅彦、松原 孝、本屋 敏郎、山田 弘幸、大石 和弘、山本 恵司、片寄 茂夫、秋田 恒雄、山路 治省、駒場 まどか、小寺 秀樹、丸岡 智子、松本 祐子、呑谷 智治	31名
一般	竹本 秀忠	2名

●助成団体

岡山西ロータリークラブ	(岡山県岡山市)
岡山県ボランティア・NPO活動支援センター「ゆうあいセンター」	(岡山県岡山市)
国際ソロプチミスト高梁	(岡山県高梁市)

※会員の皆様のお名前を掲載させていただいております。掲載が不都合な場合は、削除及び修正させていただきますので、ボランティアセンターまでご連絡いただけるようお願いします。

平成22年度賛助会加入のお願い

順正学園ボランティアセンターでは、センターが展開する活動に賛同し、協力してくださる方を広く求めています。実際に身体を動かして社会貢献を実践する時間的余裕のない方にお勧めの方法が、賛助会員になっていただくことです。順正学園ボランティアセンターが実施する災害復興支援、地域貢献、国際貢献、障がい学生支援の各活動など、皆様からの支援金が様々なプロジェクトに有効活用されます。

順正学園
ボランティアセンター賛助会員
<個人>

一口(2,000円)以上の賛助金を納入していくことにより、社会貢献活動を間接的に支援していただく賛助会員(個人)となることができます。

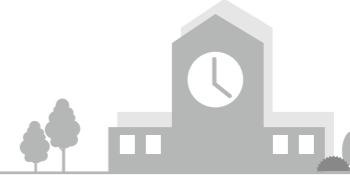
順正学園
ボランティアセンター賛助会員
<法人>

十口(一口2,000円)以上の賛助金を納入していくことにより、社会貢献活動を間接的に支援していただく賛助会員(法人)となることができます。寄付金制度(10,000円以上)もございます。

賛助会員になるための手続き

ご支援くださる方には、所定の申込書と振込用紙を送付します。

学生のページ



大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2010in京都

順正学園ボランティアセンターの学生スタッフは昨年に引き続き、平成22年9月6、7日の2日間、全国の大学ボラセンに所属する学生が一堂に会する「大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2010」に参加しました。今年は13大学から約60人の学スタが、京都の山奥にある京都府立ゼミナールハウスに大集合。参加した学生の感想を交えて、セミナーの様子を振り返ってもらいます。



「大学ボランティアセンター 学生スタッフセミナー2010in京都に参加して」

吉備国際大学 社会福祉学部 社会福祉学科4年 福井 一新

私は4回生ですが、初めてこの全国セミナーに参加しました。これまでボラセンでは、子どもたちを対象にした手作り遊び教室などに関わってきましたが、今回はそうして培ってきたボランティア活動の集大成のつもりで本セミナーに臨みました。

初日はまず、アイスブレイク等で参加者全員の気心を知った後、全体会と分科会に進みました。全体会ではグループに別れ、学生スタッフのボランティアに対する想い、各センターの運営状況や体制、地域ニーズの把握方法などについて話し合いました。その中で、岩手県立大学の学生ボラセンによる「Do Nabe net(どなべねっと)」という活動が紹介され、地域の高齢者らと学生が鍋や食事を囲みながら交流を深めるという、特色ある活動を知ることができました。

分科会ではコーディネーション、企画、広報、運営の4部門に分かれて、それぞれ学びました。コーディネーションの応用範囲や企画の振り返り方、一目で見てわかるポスターの作り方など、学生スタッフにとって大切な内容ばかり。また、夜の交流会では、各大学がお土産を持ち寄り…なぜか食器洗剤を持ってきて場を沸かした大学もありましたが、互いに親睦を深め合いました。

全体の感想としては、他大学の活動を知ることができた上に、自分たちのセンターの現状を見つめ直せた良い機会だったと思います。また、こんなに多くのボラセン関係者と係われたことも新鮮な体験でした。



セミナー分科会の様子。4部門に分かれて、それぞれボラセンにとって重要な内容を学びました



大学ボランティアセンター学生スタッフ研修合宿withゆうあいセンター

順正学園ボランティアセンターは平成22年9月18、19の両日、岡山県高梁市川上町の弥高山公園で「大学ボランティアセンター学生スタッフ研修合宿」を開きました。今回の合宿は、当センターと岡山県ボランティア・NPO活動支援センター「ゆうあいセンター」が共同で企画。両センターを含む、岡山県内6つの大学ボラセン・ボランティア団体から約40人の大学生らが参加し、ボランティアに関するレクチャーやワークショップのほか、中山間地域で暮らすお年寄りと交流するボランティア実践に取り組みました。



朝一番！丁口備中高梁駅からバスで弥高山公園へ。お互い初対面なので、まだ少し緊張気味？



弥高山公園に向かう途中、農家にお邪魔して収穫体験をさせていただきました。ピーマン、トマト、キュウリにナス…早速、今晚の夕飯メニューに使います



合宿所に着くやいなや、ゆうあいセンターの講師の方からボランティアの重要性についてしきくチャーを受けました。みんな真剣そのもの！



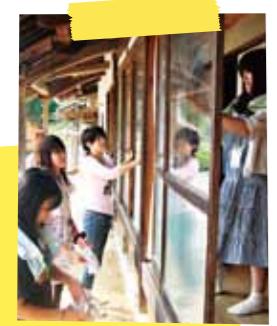
夕食の後は交流を深めるため、みんなで花火大会。こうして充実した合宿1日目の夜が更けていきます



ワーク終了後は、全員で協力して夕飯作り。美味しいカレーにポテトサラダ、チキンジャオロースの完成です！



最後は吉備国際大学に帰って、2日間の合宿で学んだことをまとめ発表。ボランティアに取り組む姿勢や、中山間地域ならではのボランティアの必要性など、多くの気づきがありました



合宿2日目は、弥高山辺で暮らすお年寄りのお宅にお邪魔して、掃除やお仕事のお手伝い。敬老の日を前に喜んでもらえたかな？



お手伝いが終わったら、お年寄りと一緒にまつたいティープレイク。中山間地域で暮らす苦労話などもうかがいました



川崎医療福祉大学
ボランティアセンター

●他大学の知らない人同士でのグループワークや食事作りがとても楽しかった。中山間地域のお手伝いは、より少人数で1日中やれば、もっと理解を深めることができると思う。●今回、100人を集めるボランティア企画について考えたが、良い案を採用し、実際にやってみるのもいいと思う。●中山間地域の50%以上が高齢者ということに驚きました。無農薬野菜など自給自足で調達していたりして、すごいと思います。ボランティアらしいことはあまりできなかつたけど、喜んでもらえて嬉しかったです。●ボランティアを企画する際、ターゲットや価値について色々なことを考えないといけないと思いました



美作大学
ボランティアセンター

●実際にボランティアに参加したことで一番印象に残っています。話を聞くだけでは、分からぬことがたくさんありました。●レクチャーで聞いた企画づくりのことや、実際のボランティアで感じたことなど、これからボラセンの企画を考える中で、取り入れていきたい。●中山間地域と聞いていたので、寂しい所のかなあと思っていましたが、人と人との繋がりが強く、皆で助け合って生きているステキな地域だと思いました。お手伝いしようとしていたはずなのに、私たちの方が元気をもらいました。●一回で終わる企画ではなく、次へつながるイベントを企画しようと思います



岡山理科大学
HANABI

●中山間地域でお手伝いをしていた時、草むしりをしながらおばあさんが「子どもの声が聞こえなくなっている寂しい」と言っていたのが、印象に残りました。●他大学のボランティアに対する意識の高さに驚いた。他大学の意見や考え方、物の捉え方を知ることができ、とても勉強になった。●いつもは科学実験のボランティアばかりで、今回のようなボランティアには初めて参加しました。高齢の方との交流は普段と違うことを経験できたと思います。●ボランティア企画の楽しさや難しさを知ることができ、良かったです。●ボラセンを活性化するために会議などの回数を増やし、具体的な意見を出し合うようにしていきたい



岡山県学生ボランティアネットワーク
キラリ☆ネット

●今まであまり体験したことのなかった野菜収穫や草抜きのお手伝いをしたのが、特に印象に残っています。土にまみれて汗だくなったり大変だったけれど、充実感が味わえたように思います。●草抜きは大変だったけど、カエルなどの自然の生き物が見れて面白かったです。農家の人はたちはあたたかくて親切だった。●農家の人々のお手伝いをしていただき、一緒にお話を聞けたことが一番嬉しかったです。お年寄りは農業を継ぎながら、地域の人々とふれ合うことが生きがいになっているようでした。●今後はもっと積極的にボランティアに取り組んで、いろんな発見や体験をしたいと思いました



順正学園
ボランティアセンター

●実際に中山間地域へ出向いてボランティアをして、地域のお年寄りとふれ合えたのが良かった。プライベートでも気軽に交流できる地域づくりをしていきたい。●農業のお手伝いをして、おばあちゃんから色々な話を聞けてとても楽しかったです。トマトやカレーがおいしかった。●中山間地域の現状を聞くにつれ、自分たちのような若い力が必要だと思った。そのためには自ら出向くことも大切。空気がとてもおいしかった。山の中の生活は大変だけど、自然がいっぱいいいなと思いました。●今回の研修や中山間地域で学んだことを生かし、自分たちが考えて交流する継続ボランティアをしたいと思った

参加した
ボラセン・団体
の声